

# 中国で増える收藏家

● 放眼日中 ●

湖北省武漢市で、ある中国人男性と知り合った。彼はとても親切な人で、以前、漢口の租界を案内され、その歴史について詳しく紹介してくれた。彼は自らの出身地であり、辛亥革命発祥の地、武昌の歴史を特に入念に説明してくれた。

ただ、彼の職業がよく分からなかった。名刺をもらおうと「收藏家」とだけ書かれていた。

今回は、彼の車で湖北省と湖南省の境にまで足を延ばした。そのとき訪ねた小さな町では、元官僚で余生を故郷で送っている老人とも出会ったが、その老人は1000〜2000年前の商家の看板から農耕道具まで、さまざまな骨董品を集めていた。骨董品収集というよりは、当時の生活用品、商売道具を保存するため、散逸しないように地元民から買い集めて、100年以上たつ旧家を借り上

げ、一カ所に保管しているという体だった。

それを見た收藏家の彼は、その行為を褒めちぎって「現代中国では、便利さや先進性の追求により貴重な文物がどんどん無くなっていくので、このような行為は文化財の保存に繋がる」と言った。だが同時に「あの老人は本当に目が利くね。この收藏品の価値は今や数倍、いや数十倍に上がっているよ」とも言う。

そして、帰りにふらつとある家に入ると、置かれていた看板をわずか200円でさらつと買い取ってしまった。彼の仕事は各地を旅しながら、このような古物を買集めることだったのだ。

今や彼のような收藏家と呼ばれる人が中国各地におり、元々は二東三文だった物に価値が生まれ、取引されるようになっていく。

さらに、武漢に帰る直前、既に暗くなった道を進みながら「今から博物館へ行こう」と言う。普通の博物館はとうに閉館している時間だったが「そこは個人博物館で知り合いがやっているから」と言いつて、夜にもかかわらず、開けてもらい見学した。個人というから簡単な収集品を飾っているだけだと思っていたら、さながら、元学校の校舎を使った2階建ての本格的な建物に、入り切らないほどの收藏品が展示されている。

入館料は無料だという。彼らによると、今、收藏家が中国全土に1万以上の個人博物館を開設して、自分たちの收藏品を展示し、一般の人々に公開しているという。

これは爆買いによる見せびらかし行為のようにも見えるが、半面、それによって急速な経済発展から文化財が守られているとも言える。文化は

経済の支えがあつて成り立つものなのだ、と今さらながら強く感じさせられる。

偶然、柳宗悦の「茶と美」という本を先日読んだ。70年以上前に書かれたその本の中に「蒐集については」という章があり「物を集めるのに金は力になるが、それ以上に熱心が力」とある。「良き蒐集は世界の価値を高める」ともあるが、日本人の場合それを私蔵して外へ出さない場合が多いともある。茶器でも能面でも、本来は使わなければその価値がないということではなからうか。

中国人は、金に任せて世界の絵画など美術品・芸術品を買い漁つていくといわれる。それはある一面で事実だろうが、経済の高度成長が終わった今、彼らの中にも、貴重な物を残していこうというムードが出てきているのもまた事実である。



コラムニスト・アジアソウオッチャー  
須賀 努

すが・つとむ 東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。